

田中冬二著

高原と峠をゆく

中央公論社

高原と峠をゆく

田中冬二

---

中央公論社

昭和三十年六月二十五日 初版發行

高原と峠をゆく

定價 一三〇圓

著者 田中冬二

發行者 栗本和夫

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸ノ内二ノ二  
丸ノ内ビルディング五九二區

電話和田倉一・二二番

振替口座東京三四番

亂丁・落丁本は本社又はお買求めの  
書店でお取替えいたします



## 目次

|                |   |
|----------------|---|
| 浪漫的な山里         | 五 |
| 浴泉記            | 二 |
| 飛驒平湯           | 六 |
| 蓼科高原           | 三 |
| 小谷温泉まで         | 六 |
| 湯峠——糸魚川へ——     | 七 |
| 三國峠の大蠟燭を偷まうとする | 四 |
| 卯の花焼——旅について——  | 五 |

|               |   |
|---------------|---|
| 秋の夜話          | 一 |
| 秋の夜話          | 二 |
| 川治温泉          | 七 |
| 山間の湯の秋の一夜     | 七 |
| 三里ヶ原          | 七 |
| 小梨の花の咲く頃      | 八 |
| 妙高の麓にて        | 八 |
| 九十九里濱         | 八 |
| 煙草の花          | 八 |
| 山の花嫁——石楠花の花—— | 九 |
| 雨             | 九 |
| 永源寺の石         | 九 |

|            |     |
|------------|-----|
| 城下の町にて     | 100 |
| 炎天         | 105 |
| ふるさとは明日田植  | 107 |
| 幼き日の思ひ出    | 113 |
| 遅日         | 116 |
| 秋の小品       | 120 |
| 山の湯小記      | 124 |
| 山莊         | 131 |
| 麥の伸びゆく夜を信ず | 134 |
| B. V. M.   | 137 |
| ホップ草の匂ひ    | 140 |
| アヤメ香水      | 143 |

|                |    |
|----------------|----|
| 北國の夏           | 一四 |
| 秋草模様           | 一五 |
| 山の雪賣           | 一六 |
| 山女魚            | 一七 |
| 高原の人々へ         | 一八 |
| ランプの下で讀んだ本     | 一九 |
| 野分のあと          | 二〇 |
| 爐邊・燈火・橡の花      | 二一 |
| 寢覺の蕎麥屋         | 二二 |
| 祇園祭まで——黃梅雨日記—— | 二三 |
| あとがき           | 二四 |

## 浪漫的な山里

「春雨けむる山里」といふ小學生の習字を張り出した小さな驛があつた。春雨けむる山里。月並のやうではあるが、何かまた心ひかれるものがある。春雨が朝から、しとしと降つて、彼岸ざくらの花が濡れてゐるやうな山里。そしてその雨に、桑の芽がほのぼのと、うす青くほぐれはじめ、山吹の花、つつじの花、おだまきの花が咲かうとする山里。思ふさへ心たのしく、あかるいものを感じる。

「春雨けむる山里」春雨といふ、女性的なこれだけの言葉が、山里といふ荒い感じを、たいへんやさしいものにしてゐる。

山里について、私は信州の戸隠、鬼無里、柵の村々、それから白峯の三山——北岳、間の岳、農鳥岳の下、奈良田、蓼科の麓の北山村、野麥街道沿ひの村などを思ひ出す。



釜無の蔦木は古い宿場であるが、今はすっかり廢れて、山里といった感じのする處である。柿並木がつづいて、昔の遊女屋のあとも寂しい。

戸隠は小梨の花の咲く晩春から、夏の季節へかけてが一番よい。紅葉に時雨の來る頃の佗しさもまた風趣がある。長野から戸隠への途中。飯綱の高原につつじの花の咲く頃。あの高原の大鳥居のあたり、若草の上に寢轉んで一やすみする。

寢轉んだ頭のすぐ上に、飯綱山は、かぶさるやうに聳えてゐる。白いうすい雲が頂きをかすめてゐる。

何ともいへぬよい香りがして來る。それは野茨の花の匂ひである。さうしてゐるうちに、快いまどろみを催す。この飯綱の高原は蕨わらびの多い處だ。その時分になると、長野の人々は家族づれで採りに來る。多い人は一貫匁から二貫匁も採つてかへる。

それからまたこの飯綱山について、私は長野の或人から天狗の話をきいた。

それは星の美しい夏の夜であつた。飯綱の頂きをきはめた四、五人の人が、その小屋に泊つてゐた。山上の夜はさすがに、夏ながらうす寒く、人々は小屋の中で火を圍んで、莫迦話等に耽つてゐた。すると突然、小屋に向つて礫がひどい勢でとんで來た。一つ二つ三つ……それはしだいに數繁くまるで降るやうで、板小屋は今にも破れんばかりである。皆顔を見合はせた

まま恐怖に戦いてゐた。やがて礫がやんで、ほつとした間もなく、こんどは小屋が倒れんばかりに揺れ出した。それはしばらくしてやんで、もとの静寂にかへつたものの、人々は一時は全く生色もなかつたといふ。

さて戸隠には坊が幾つもある。何れも古風な質素な構へで、ひとつの風格といふやうなものを有してゐる。そしてまた苔蒸した錆びた庭も好い。おそらく戸隠は、今でもそんなに俗化してゐないであらう。

戸隠は閑靜である上、氣溫も盛夏の日中、平均二十度位であるから、夏期には受験準備の學生が、坊を宿として滞在するものが多い。

おちついて勉強したり、調べものをしたり、書き物したりするには恰好の處である。

紫外線のある庭に、あやめの花、あぢさゐの花が咲き、山水が潺湲と走つてゐる。水芭蕉の葉に包んで冷やした蕎麥の味。それは全く忘れ難いものである。

山の美しい夕焼が褪せて、灯ともし頃となる。坊の圍爐裏では、岩魚を焼いたり、厨では摺鉢に何か摺つたりして夕食の仕度に忙しい。その中、外は暗くなり、障子を閉めないと寒い位の夜となる。外へ出て遊び處といつたものはない。燈火のあかるいのは、煙草など賣つてゐる荒物屋位のものである。

潜り戸の障子に燈火のぼうと映えてゐる家がある。その家の中から、手細工の竹籠や箆を拵へる音がきこえる。戸隠の竹籠は丈夫で永持ちがする。その新しいうちは、青々としてゐるが、使ひ馴らしてゐるうちに、光澤のあるべつかふ色になる。

戸隠、鬼無里、柵の村々は麻の産地である。

麻は風に弱いものなので、かうした山間部がよいらしい。麻は三月末から四月初め播いて、八月末には刈りとる。このへんの八月末は、もう秋口なのである。麻を刈つたあとへは蕎麥をつくる。刈りとつた麻は一週間位乾かして、それから煮る。

この地方の中鬼無里では、麻殻をどの家でも、門や軒下など家の周囲にたてかけるが、昔はその多いのを誇りにしたものだといふ。

「麻は妙なもんでなあ、花の咲くのは種が出来ねえで、花なんか無えのが種がとれるでなあ……」

「人間もあんまり綺麗だと子が出来ねえやうなもんさ……」

「それにまた麻は伸びの速えもんで、時季によつちや一晚に五、六寸も伸びるぞえ。」

私はこの地方の人が、こんな話をしてゐるのをきいた。

萬葉集

よみびとしらず

庭に立ち麻を刈り干ししきのぶあづまをみなを忘れたまふな

鬼無里村を山村のモデルとして、すこし書いてみよう。

鬼無里村は、面積十一方里、廣袤東西三里十八町南北七里三十一町。北に狭く南に廣く三角形をなし海拔六百米の高地である。東にも南にも山脈がつづき、又西から北へも村境縣境を劃する連峯がつづき大盆地をなしてゐる。

村の中央には一夜山といふ一、五六〇米の山が聳えてゐる。裾花川はそのうしろ、裏戸隱の千古斧鉞の入らぬ大森林に源を發してゐる。

その裾花の上流には木曾殿あぶきの古跡がある。往時木曾義仲の殘黨が籠つて再舉を企てたといふ大岩窟である。この附近には岩魚が群をなしてゐるといふ。役場からここまで約二〇軒である。

さて村の部落は九十七ある。人口は約五、五〇〇人である。

家畜は牛無し。馬三三〇、豚六、山羊一二、家兎一、二四七、家禽は鶏五四〇、鷺<sup>あひろ</sup>無し、養蜂箱數四五である。

土地は國有地二八、三三三反。民有地、田二、四二七反、畑六、八七五反、宅地四、〇九八反、

山林三二、六八七反、原野一九、六九二反。

農産の作付反別は米、大小麥、大小豆、蕎麥、麻が何れも一、四〇〇反乃至一、七〇〇反位までである。養蠶は夏秋蠶の收繭一四、五八九貫である。（この村勢は昭和十二年五月の調）

大體養蠶と麻が主である。それから工産としては、麻から製する疊絲である。

氣候は最高三三度五分、最低零下二三度二分。

盛夏の日中は、相當氣溫が高くなることもあるが、概して山氣が爽かで凌ぎよい。

結霜は十月二十三日とあるが、事實はもつと早いらしく、十日頃には山々は黄に紅にうつくしく染まる。

傘だの屋敷だの押出、宮崎等云ふ部落は、縣道から見あげるやうな山の懷や山隈に點々と散在してゐる。冷澤だの栃平だのいふ部落になると、山又山の間を縫ひ村のどんづまりである。家並のつづいてゐるのは大字鬼無里だけである。ここには郵便局もある。宿屋もある。呉服屋もある。雜貨屋、荒物屋、菓子屋もある。

鬼無里村の傳説や名所古跡の由來は、浪漫的でなかなか興味深いものがある。即ち京師で宮仕へしてゐた紅葉が罪あつて都から追はれ、この地に配流された當時ゐたといふ屋敷あとは、内裏屋敷と云はれてゐる。そしてまた紅葉が、京師に模して命名したと傳へられる、東京西京

などいふ名も、今尙部落の名としてのこつてゐる。

それからまたしがらみ柵村との境、荒倉山を越えた處、柵村になるが、そこには紅葉の籠つたといふ石窟がある。平維茂が鬼女紅葉を征伐するに當つて、祈願をこめたといふ、別所の北向觀音はこの方角に向つてゐるとも云ふ。

更にまた美しい悲しい名の、月夜の陵といふのがある。これは遠い白鳳の世、故あつてこの地に蟄居した皇族某の陵と言ひ傳へられてゐる。

月夜の陵。何か哀史でもありさうな悲しい名である。

## 浴泉記

旅先の宿屋は、豫めその様子を聞いて居れば兎も角、ゆきあたりの場合には、その環境や感じの如何によつて決めることが多いが、またその宿屋の名前にひかれることもある。

數年前のことである。増富のラジウム鑛泉行を思ひ立ち、案内書を繙くと、宿屋は津金樓、金泉湯、不老閣、金峰館、藤本樓と出て居り、何だか氣遅れがした。津金樓、藤本樓などとは、明治時代の遊女屋の名を連想させる。

ところが行つて見て、意外なのに驚いた。

それは樓だの閣だのといふやうな仰山なものでなく、まことに粗末な鄙びたものであつたからである。津金樓といふのに登樓した。

平家建で板屋根の上に、トタン製の鯨しやちを附けてゐたが、これは寧ろ稚拙で微笑まれた。

浴場の窓が硝子戸でなく、黄ばんだ障子であつたのも氣に入つた。それは鑛泉の溫度を保つ



上に、硝子戸より障子の方がよいのであらう。

山毛櫨よもぎの新芽が美しい頃で、夕暮近く私は溪へ下りて釣糸を垂れた。山女魚を釣らうとしたのだが、その一尾すら獲れなかつた。

宿へ歸ると、部屋には火燵がしつらへてあり、その上に點つた釣ランプの石油がぷうんとした。食膳には岩魚の鹽焼をつけてくれた。そんな何よりのものを、膳の上に見ながら、折悪しく腹をこはしてゐた私は酒が酌めなかつた。未だにそれを残念に思つてゐる。その夜、私は宿の前へ出て、この邊で西山と呼ばれてゐる白峯三山——北岳、間岳まのたけ、農鳥岳の上あたり、もう傾きかけてゐるオリオン星座を見たことを、はつきり覚えてゐる。

西山といへば南アルプスの登山口になつてゐる西山温泉を訪れたのは、眞夏の八月であつた。日ざかりを早川口からトロ馬車あらくらで新倉まで二十二軒。それからさらに十二軒徒歩。

沿道の風物は山にかかつてゐる夏霞、青い葡萄の房、獨活うどくの花。何れも山國の夏らしかつた。温泉宿は新湯と古湯の二軒がある。私は古湯の方へ泊つたが、湯治客や登山客でたいへん混雜してゐて部屋はなく、やつと帳場をあけて貰ひ、そこへ途中で一緒になつた織物商の店員と合部屋させられた。翌日どこか一部屋空くだらうと、思つてゐたが遂に空かないどころか、夜更寝てゐるのに起されて、帳場からこんどは狭い納戸へ移された。そのわけは北岳から下山の一

群の人が到着したのだが、その人達は山で雨に遭ひ疲れ切つてゐるから、どうか譲つてやつてくれといふのである。言はれるままに納戸へ移つたところ、一晚中蚤に攻められて、一睡も出来なかつた。翌朝はやく温泉へはいつてゐると、私は同じ浴槽の中にどこかで見覚えの顔を見た。日に灼けた顔、髭の濃い男性的な顔。

精悍の中にも何か親しめるやうな顔。

慥かにどこかで見た顔である。向うでも此方を訝しげに見てゐる。黒いスキー帽の顔。

さうだ。先年増富のかへり、山櫻の花の咲いた鹽川の部落で、偶然顔を合せ、それから道連れとなり、共に菲崎から中央線で甲府までの間、色々話合つた山梨縣廳の農林技手である。全くの奇遇でなつかしく、温泉の中で互に手を握り合つた。西山から一里餘り奥の奈良田は、美しい山郷である。三十戸ばかりの家が、山間のやや開けた處に寄合つてゐる。家の周圍に僅かばかりの、豆や蒟蒻こんこんにゃくをつくつてゐる。軒下には黄蘗きはだの皮を積んでゐる。黄蘗は染料になるのである。ここには外良寺といふ寺があつて、御神木の榎もみの杖を賣つてゐる。これを常時使用してゐれば中氣に罹らぬと云ふ。酒好きの人へ土産にしたら面白いだらう。

奈良田は天平勝寶の世、孝謙天皇御遷居の地と傳ふ。外良寺の「孝謙天皇御遷居縁起鈔」にその由來が記されてゐる。孝謙天皇は聖武帝の皇女であるが、當時天皇は大炊皇子との争ひを